

タカは倉之助の講釈など聞くヒマもないと言
いながら、「板の間」、そう、従業員食堂の方へ
出てゆく。ゴダンさんにこのスイカを分けてやる

う。朝の片付けすんで、みんなもおるやる…。

もう八日目、もうこの賭けは勝ちいくさに決ま

ってるやんか…。妹のシマからこっそり届いた

スイカである。タカは奮発して、丸いまま板の間に

持ち込むのである。普段は丸の半分だから、よほ

ど、ゴダンさんのことを気に入っているのだろう。

もうお金を払っていないのだから、千鳥の間はも

やらかんやらみんな贅沢だけゆうようになったわ。

タカは、このカナダからの珍客さんに昔の

日本人の姿を見ているかのようにさえ思えたの

だろう。

店の者たちも、ゴダンはん、ゴダンはんと言

ながら、一緒になって気持ちよく仕事している。

ご飯も板の間で食べるといって、なんでも食べる。

部屋は住み込み部屋の片隅に空いた部屋があり、

そこでもいいというから、そのとおりにしている。

タカはその部屋をのぞいて、

「ゴダンはん、牛乳瓶に花までいけて、まあ、

つたいない、私はどこでも眠ることができる…

第一こんなこと、近頃の日本人の口からは、タカ

は聞いたこともなかった。

終戦の頃、ほんまにアメリカ軍が怖いというて、

金毘羅さんの山の裏に女は顔に墨塗つてにげる

と怖がついていたぼろぼろの日本人たちが、今はこ

のすし辰の部屋が狭いだの、部屋に風呂はないの

か！だのと、ほんまにしょうがない客も増えたり、

仲居さんは雑巾がけをさせただけで、もう腰が立

ちません、私、力仕事は向きませんねん…なん

おトミの部屋とは比べモンになりませんで、おト

ミは壁に舟木一夫やら三田明ばかりですやろ。

知ってますか、ほれ、日本のシンガーですわ。シ

ンガー」

ゴダンさんも竹を割ったような気性のタカが好

きになっている。なんでもはつきり言うのに、ま

ったくいやみがない。ゴダンさんはこんなに自分

の考えをはつきり言う日本人女性にはじめて会

ったと感じていたのである。

ドタドタと廊下を歩く、前島先生の足音がする。

聡子は先生の足音を聞いて、思わず、応接間から飛び出した。

「先生、どうでした？」

前島先生は近所の内科医院の先生で聡子も小さな頃から随分とやっかひになっている医者である。

「いやあ、なんぼ若いといつても、慣れないことで疲れが出たんでしような。まあ夏風邪の一種や

おかゆを雪平鍋で作るように言いつけている。

板の間ではトミちゃんやお伊せさんが臨時の人たちと一緒に、心配そうに話し込んでいる。

トミちゃんはゴダンさん頑張ったのに気の毒やと言いつつながら、こうお伊せさんに聞いていた。

「なあ、熱で寝込んだ分は待ってもらえるんやろか？ 水入りにできんのやろか？」

「あんた、お相撲とちやうんやで。ほんでも、待つてあげてええんやないか？ 待ったをかけるんは、御家はんの仕事やろなあ…」

ろけど、熱が高いから安静にさせてくださいよ」

ゴダンさんが突然、熱を出して、倒れたのである。タカも福代たちも慌てた。それで前島先生に往診を頼んだのである。

タカは、

「朝のスイカがいかんかったんやろか？ 食べさせなならよかった」

珍しく弱気な声で、聡子と倉之助に言うのであった。

今夜はゴダンさんのこと、私がみると言いながら、タカは板場に行つて、トンボさんと重五郎に

お伊せさんは御家さんなら、それくらいのことできるとトミちゃんをなだめている。

一夜あけてもゴダンさんの熱は下がらなかった。

朝の仕事が一段落するとトミちゃんが、応接間で新聞広げて、ネスカフェ飲んでいる倉之助に、

「若さん、あのう、これ見てくれますか？」

と広告の紙の裏に書きつけた、三行ほどの文章を見せた。店の者はよく倉之助のことを若さんと呼ぶ。

『単願書』

すし辰の従業員は、ゴダンさんの熱が引くまで、日をのばして待っていたくように、弁慶さまにお願します」

倉之助は、「ふん、ええでえ」と言いながら、机の引出しから赤鉛筆を取り出し、紙を眺めるとすぐ吹き出して、「おい、トミちゃん、『単』ではのうて、嘆くんや！ 嘆願や、嘆願書」と言いながら、本当にさつと赤を入れた。

『嘆願書』

弁慶さま

配膳場の方に行った。

「うちのもんもなかなかええところあるやないか」

倉之助の横で朝からファンタオレンジ飲んでいる聡子に向かって倉之助がつぶやくように言った。

「ほんでもなあ、心配なことやわ。弁慶が待つゆ

うてくれても、ゴダンさんが熱引かんとどうにもならんで。心配や。おう、聡子、おとうちゃんにもそのファンタ、わけてくれ、心配でノドが渴くわ」

「おとうちゃん、そのコーヒーは？ それ飲んでからにしなよ」

ゴダンさんは高熱のため寝込んでおられます。お約束の件の残りの二日をどうか引き伸ばしていただきますようお願い申し上げます。

すし辰従業員一同

「これでどうや？」

「ひやー、若さん、すごいなあ。やっぱり毎日毎日新聞ばかり読んでるだけありますなあ」

トミちゃんはペコリと頭を下げ、タカに許してもうもらっているのだから、これからこの文章を写して、検番の弁慶さんに届けに行くと言いながら、

「お前この頃、ばあちゃんみたいなこと言うな」

その次の朝、やっとゴダンさんは起き上がった。おかゆを口にすることができるようになった。タカは二日の間、ゴダンさんにほとんどつきつきりで看病したのである。ゴダンさんはしきりに水がほしいといっていたようである。

嘆願書を届けたものの弁慶さんの返事はなかったし、この間の佐藤さんの宴会以来、お座敷も不思議と弁慶さんにはかからなかったのである。

タカは帳場の隅で腕組みしていた。ゴダンさん

もあと三、四日したら、大阪に戻らないといけな
いらしい。

(十三)

「アシタ、ワタシハオオサカニカエリマス」

熱が引いて、二日経った朝、ゴダンさんは起き上
がって、帳場まで来れるようになっていた。

「ヨクヤスマシタ。ネツハモウゼンゼンアリマ
セン」

「もう微熱もないですか？」

聡子はこんなにやさしい口調で話すタカは見た
ことがない。

「ナイデス、三六ドダケ」

そうと微笑んでタカは返事をする、聡子に、

「ほれ、聡子、その包みを検番に届けてきな！」

見ると応接間の入り口に三味線が立てかけてあ
る。

「あのな、弁慶、朝のうちは大概、検番におるは
ずやから、それ持って、おつかいに来た、これは賭
けの負けの品もんや、そうゆうて、渡してきな」

聡子は怪訝そうな顔をしたが、

「うん、わかった、行ってくるわ」

タカは、賭けは済んだ、弁慶はんは頑固やわ。

今回はこれで引くけど、いつかきつとゴダンさん
にはもういつペン琴平に戻って来てもらうて、ほ
れで、弾いてもらえるようにこのばあちゃんがい
てみせるでえ…と言いながら、聡子を送り出した。

夜はタカが送別会や！と言い出して、また夏の

すき焼きでゴダンさんを囲んで、ふうふう言いな
がら夕食をしたが、当のゴダンさんはまだ食事が
たくさんとれないようであった。聡子も御相伴し

だが、なんだかあれほど食べたと思っていた久
しぶりのすき焼きもなんとなく悲しい味がした。

トミちゃんやお伊セさんも座敷に呼ばれたので、
遠慮しいしい、「やつぱりええ肉のすき焼きはちよ
つとちやいますなあ」と言いながら、にこにこし
ている。

「なあ、トミちゃん、これもゴダンさんのおかげ
やなあ」

「ふんふんそうや、ゴダンさん、また来てな、ほ
んまやで。今度は春休みに来てな。トンボはんが
タケノコご飯作るゆうてる。あの人のタケノコな、

美味しいで」

ゴダンさんはここにこして、みんなの話を聞いている。いつもより口数が少ない。倉之助はトミちゃんたちが啞然とするほど、流暢な英語で話しかけている。いい酔いかげんなのだ。ゴダンさんは実に丁寧にその言葉に受け答えをしている。

食事のあと、ちようど八月十五日だから、散歩がてら、聡子と一緒に金倉川の灯籠流しに行くとよいわとタカに言われて、ゴダンさんは出かけた。

もう随分と具合はよいらしい。

三十分くらい一の橋のたもとで、聡子はゴダン

さんと一緒に川面に浮かぶ灯籠を見つめた。いつもは汚れているように感じる川面がこの上なく美しく思えた。灯籠の光は静かに煌いて、聡子たちの前を流れすぎてゆく。

(以上1月7日放送分)